

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第482号 平成25年1月29日

玉虫色では解決しない

大阪市教育委員会は、バスケットボール部の顧問による体罰で、同部主将の男子生徒が自殺した大阪市立桜宮高等学校の入学試験について、1月21日臨時の教育委員会を開き、

- ・ 体育系2科の募集は中止し、普通科に振り替える
- ・ 本来の普通科は、試験日程3月11日で、国・数・英・社・理の5科目で実施
- ・ 普通科に振り替える体育系2科は試験日程も試験科目も従来のまま、2月20、21で国・数・英の3科目と運動能力を測る実技検査を行う

という方針を決定しました。

これに対して、募集停止を強く市教育委員会に求めていた橋下市長は「素晴らしい決定をしてくれた。改革の第一歩が踏み出せた」と語ったとしています（1月22日付読売新聞他）。

桜宮高等学校の体罰自殺事件に関しては当初、市の教育委員会や学校には当事者能力が欠けていると思っていましたが、今回の決定を見て、なおその思いを強くしています。

今回の事件において、まず問われなければならないのは、

- ・ 桜宮高等学校における教師達の体罰を容認する体質
- ・ 校長や市教育委員会の体罰に対する問題認識の甘さ
- ・ 校長や市教育委員会の危機管理能力の欠如

という事であり、そして何よりも、再発をいかに防ぐかという具体的な対応策ではないでしょうか。

しかし、今回の市教育委員会の決定を見たとき、市教育委員会や学校は、桜宮高等学校に関わる問題の何を解決しようとしているのかが見えて来ません。

報道などが指摘しているように、募集中止を求める市長と、募集継続を求める保護者らの双方に配慮した結果（1月22日付読売新聞）という事ですが、実質は、体育系2科を普通科に名前を変えただけにしか見えない、誠に面妖なものになっています。

これを「玉虫色の解決」というのかも知れませんが、このような解決方法で一番被害を受けるのは生徒達という事になります。

普通科に切り替えた旧体育系2科は、一体今後、どのような教育を展開していくのでしょうか。

普通科として新しいスタートを切るのか、それとも、名前は普通科のまま、従来と変わらぬ教育を展開するという事なのか。更にいえば、元の体育系2科に戻すつもりなのか。こうした将来方向が見えない中で、とりあえず入試だけは実施してしまおうということだとすれば、問題の先送りといわれても致し方ないでしょう。

何故、このような事態になったかといえば、市教育委員会も学校も問題の深刻さを理解していないという事だと思います。

橋下市長は、従来から教育委員会や学校に対して大胆な変革を求めて来ています。そうした立場からすれば、今回の桜宮高等学校の体罰自殺事件は教育委員会や学校に楔を打ち込む絶好の機会と映ったのではないかと、私は勝手に想像しています。

一番の問題は、市教育委員会も桜宮高等学校も、明確な改革の方向性を示せなかったという事に尽きます。

仮に、体育系の2科は存続させないと判断するなら普通科への振り替えなど姑息な手段を講じず、単純に募集停止をすれば良い筈です。

逆に、体育系の2科は、依然として必要であり教育的成果を上げ得ると判断しているなら、引き続き募集すべきでしょう。

桜宮高等学校の教員に問題があるというなら（私はそう思っていますが）、校長をはじめ教員を換えるべきであり、その為に、市の教育委員会は任命権者としての責任を強力に果たすべきでした。

結局、今回の騒動を通して明確になった事は教育委員会や学校の主体性のなさであり、本当に子ども達の事を考えた結果なのかという疑問が残ります。

子ども達の為にも、桜宮高等学校が今後、大人達の様々な思惑の中で漂流してしまわないよう願っています。（塾頭：吉田 洋一）